日本の磯漁伝統の研究

一磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究

田邊 悟

要旨

わが国沿岸の海付近の村の中には、地先の磯漁場で、アワビ等の貝類、ワカメ・コンブ・テングサなどの藻類、タコ・磯魚等の捕獲をおこなって生計の主要なたしにしてきた村がある。それらの捕撈対象物の漁撈方法をみるとき、利尻富士町の「島泊字栄町は、見突き漁、すなわち、地元でいう「イソマワリ」の事例をモウグラフとして掲げる。以下、調査地の「イソマワリ」の事例をモウグラフとして掲げる。

次に、磯漁のイソマワリ、イソマワリ、アワビ、コンブ、ミズダコ、海村文化、漁撈伝承、海村生活

キーワード

磯漁、イソマワリ、イソマワリ、アワビ、コンブ、ミズダコ、海村文化、漁撈伝承、海村生活
(2) (1)
研究目的（承前）

(1) 北海道利尻郡利尻富士町鴨泊字栄町の「イソマワリ」

(2) はじめに
Ⅲ 地域の史的背景など

(3) 漁業生産歴と漁法

(4) 農業生産歴と農業

(5) イソマワリ（漁法）と漁具

(6) その他の漁法と漁具

(7) イソブネ（漁船）・その他の漁取り

(8) まとめ
（1）研究目的

わが国では、アワビやコンブをはじめとする魚貝藻類は、古代から裸潜水漁撈漁者（海士、海女、蟹人）によって捕撈されてきた。しかし、今日まで裸潜水漁撈漁者（アマ）、による捕撈の漁撈習慣等の調査・研究は不十分で、その実態は不明で、全国的な調査が行われた場合、この調査結果は実際に多少の調査・研究の地戦があり、その実態調査による事例研究であり、その後、日本全国における実漁伝統の全貌を明らかにするための事例である。

（2）漁撈の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[1] 北海道利尻郡利尻富士町鴨泊字栄町の「イソマリキー」
本調査地に和人（日本人）が移り住んで産業をおこすことで生計の主要な部分を立てているようになったのは明治期以後がほとんどであろう。しかし、以後、百年以上に及ぶ年月が流れたことは一地域に伝統的な暮らしを営むことによる生活文化が育まれていったことはたしかである。

初期の採捕対象物の主なもののはアワビでありコンブであった。この主要な生産物にあわせて最初は自家消費用の捕採対象物であったものがしだいに商品化され、調査当時の大捕捕対象物の数に増加していたのは当然のことであった。利尻島や礼文島など北海道でも日本海側は対馬暖流が北上するので当然産のアワビが生息するが、親潮（寒流）の影響をうける太平洋側は恵山崎あたりまでが分布の北限となっている。

この地域における礁漁伝統で注目すべきは第一にコンブ採取である。特に「利尻昆布」は日本一の名産などといわれる。早くから全国的に有名で品質が良いため高価で売買されたため、漁業者もその生産に力を入れてきた。

本論においても、コンブの利用は世界的にみて、主にアジアの限られた地域での需要であり供給であることにも注目してお

く必要がある。

本調査地の北海道利尻郡利尻町鴨泊字栄町は利尻空港に近く、利尻島の北部に位置する。鴨泊港にも比較的な近い。島内としては交通の便に恵まれている。(地図参照)
地域の史的背景など

島名の「利尻」がアイヌ語の「リイシリ」（高い山）からきているように、アイヌの住む島として歴史は古い。

近年でもアイヌの先祖が使用していた石器等が遺跡の発掘調査により出土している。

「宗谷郷土史年表」によると、この地域（宗谷地方・稚内・利尻島・礼文島）が松前藩領となったのは天正十八年（一五八五）とされている。

利尻町方志志本町にある「利尻町立博物館」の史料によれば、松前の商船がルイシリ（利尻）リイシリ（高麗）に来ても、アイヌと交易をおこなったのは寛文九年（一六六九）からのことだとされる。

その後、松前藩は蝦夷地を区分けして商場を設けるに至る。明治二年（一八六九）には同立場所となり、ニシン・タラ・イリコ・ホシアザビの商物を交易品として出荷するようになる。

時の交易品にかんしては、同博物館によると、蝦夷地日記（田草川伝次郎）からの引用として、文化四年（一八一七）には独立場所となり、ニシン・タラ・イリコ・ホシアザビの商物を交易品として出荷するようになる。

また、文化元年（一八〇四）以後、この地域にロシア船がたびたびあらわれるようになった結果、会津藩士など
による蝦夷地の警備が強化されるように、
以後、明治維新の頃には利尻島に和人の定着もかなりすすみ、アイヌはほとんどいなくなってしまった。}

も、このように明治初期に葉取りと内地人がかなり住みつくようになったが、それでも島の沿岸にはニシン建網渔の

来島したが冬期になると帰ってしまう出稼ぎ者が多かった。

しっかりと、親方（船頭）が函館・青森・南部方面や東北日本海沿岸の秋田・山形などから雇って来たヤン衆と呼ばれる漁業労働者

で、ニシン建網渔をしないための話しを聞いた同地方の人々の中には一家をあげて移り住む者もでるようになった。

こうした漁民は「小前の者」と呼ばれ、貧しくはあっても、ニシン建網渔の親方が経営する番屋のヤン衆たちは別

の家族ぐるみの労働力として出稼ぎられた独立した漁民（経営者）であった。

こうした黒部も小さな磯船を一艘もち、使用するニシンの網漁がすぎてもホッケを漁獲したり、磯魚を

漁獲したりしていった。それに、夏はコンブ漁、ついてイカやタコ漁、秋になればクラ漁、冬はアワビ漁など、

年間を通じてなんかかつ漁だけで生計をたてることができるので人々の暮らしは充実していた。調べ当時では島の北に位置する鵜泊のほか南の鬼脇、西の أعمال、南西の仙本志などに入人口が集中し、市街地が形
漁業生産歴と漁法

利尻地方では、「ソブノ」と呼ばれる長さ約
七メートル、肩幅ノメートル二十二センチほどの
小船に一人で乗り、海中海底を覗き見、長
い棹（竿）の先に付けたカギやツマ等でアワ
ビ・ワカメ・コンブ・ウニなどを捕揚する漁法
を「イソマワリ」という。

調査当時、鶴泊地区の漁業協同組合に加入し
ている組合員は四百八十名いたが、そのうち、
以後、それに大漁に漁獲できたニシンがまっ
たく獲揚してこなくなったましてからならば、イ
ソマワリをするか、出穂ぎに出るかの選択にせ
まる結果もあり、一時期増加したものの

北海道利尻郡利尻富士町鶴泊字栄町の漁業生産歴（新暦）（昭和8年12月1日生）

<table>
<thead>
<tr>
<th>種類・漁法</th>
<th>1月</th>
<th>2月</th>
<th>3月</th>
<th>4月</th>
<th>5月</th>
<th>6月</th>
<th>7月</th>
<th>8月</th>
<th>9月</th>
<th>10月</th>
<th>11月</th>
<th>12月</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>イソマワリ</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>イサリ</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>イカ一本釣</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ニシン刺網</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ホッケ刺網</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（平成4年8月27日調査）
調査当時には後継者不足が問題化していた。

だが、アワビ採取は十月初旬頃からがじより、十二月下旬にかけて採取されてきた。しかし、漁獲量としては少なかった。

調査当時はウニの種類による『口明け』や『口閉じ』が厳しく守られているが、こうした採取期間の規制がない時にはノナ（キタムラサキウニ）もガンジェ（エゾバフンウニ）と同じく六月中旬頃から九月中旬頃まで採取される種類は地元でノナと呼ばれるキタムラサキウニである。

ウニの採取は六月中旬にはじまり、八月下旬まで続く。この時期、夏に採取されるウニは地元でガンジェと呼ばれるエゾバフンウニの種類である。これとは別に九月一日より一ヶ月間限って採取される種類は地元でノナと呼ばれるキタムラサキウニである。

昭和の初め頃まではイソマワリによりコンブ採取をする者でもウニを採取しない人は多なかったという。
コンブ採取はイソマリ（根付漁業）をおこなう「コリョウシ」（小漁師・小前の者）の最も重要な採取対象物であることが、この地域の最も大きな特色である。七月一日から九月下旬までが漁期であり、毎日、天候に恵まれれば三時間ないし三時間が時間制限をもっての漁で、本調査をおこなった時には、漁業協同組合の役員が揚げる旗を合図に一斉にコンブ採取をおこなわれていた。瀬川清子さんが著した「海女」の中にも、利尻島の海女輩はかよしいと引っかけているので、私等が海に飛び込んで捜いとったらびっくりして怒ってくれた。と説明する。特にトウブ、エキブガが非常に多いところ、海が荒れるとエキブガが沢山よく、北海道の人人は長い竿で一本ずつひよいひよいと引っかけているので、私等が海に飛び込んで捜いとったらびっくりして怒ってくれた。と説明する。

テングサ採取は九月初旬から十一月下旬までにおこなわれてきた。利尻島では明治から大正時代にかけて、テングサ採取のために、三重県や石川県からアマ（海女）と呼ばれる人達が出稼ぎに来たことがあった。地元の漁民によるとテングサ採取は裸潜き漁によっておこなわれたのではなく、テングサツキや「マンガ」と呼ばれる漁具を用いての採取であった。と説明する。

イソマリによるタコ漁も十一月初旬から翌年の十一月下旬までにおこなわれた。このタコ漁は磯のまわりを探るの
とはまっていなかった。

上述したように、イソマワリによる漁果は十一月初旬頃からははじまり、十一月下旬頃までおこなわれた。主な魚種はアブラッコ。ニシンは三月初旬よりはじまり、四月いっぱいまで。漁のあるときは五月の中旬頃までつづけられた。しかし、ニシン刺網は大型なので、その準備に十一月初旬頃からとりかかり、また、漁期がつづくのもあとしまつに半月ほどつ

いやした。ニシンは昭和三十年の春から不漁になり、それ以後、ほとんど廃漁してこなくなってしまった。

ホッケはニシンのあとに廃漁してくるので、ホッケ巻網は五月の中旬からはじめられ、六月下旬までおこなわれた。
農業を含む、も代表的な消費用の野菜づくり程度の畑仕事である。水田は不要である。

農作物の種類として、馬鈴薯の他に大根、キャベツ、ホウレンソウなど、野菜が主なものであった。馬鈴薯は五月下旬に植え、九月下旬に収穫した。大根は秋大根で、八月初旬に種を播き、十月下旬に収穫し、自家消費用の漬物づくりの食材とした。その他の春キャベツやホウレンソウなどの野菜は四坪ないし五坪ほどの小さな畑で作る程度なので、農業といえばほどのものではなかった。

「イソマワリ」は九月初旬頃の海水が澄みはじめる頃からはじまる。利尻島の冬季は、風が吹くが雪の量は少ないと聞く。このような自然条件の中では「イソマワリ」をおこしなのに必要な技術は、まず初に「イソソネ」のキリマツで、この切り囲しの操船をするには、片足で舵をかく技術が最も重要だという。

<table>
<thead>
<tr>
<th>種 類</th>
<th>1月</th>
<th>2月</th>
<th>3月</th>
<th>4月</th>
<th>5月</th>
<th>6月</th>
<th>7月</th>
<th>8月</th>
<th>9月</th>
<th>10月</th>
<th>11月</th>
<th>12月</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>馬鈴薯</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大根</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>秋大根</td>
</tr>
<tr>
<td>野菜</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>春キャベツホウレンソウ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（平成4年8月27日調査）
だ。入口は悪いと船から海中・海底を観ぐための「ガラスパーカー」を口でくわえることができないので、丈夫な歯が

イソマリによるアワビ採取量は十月初旬から十二月下旬にかけておこなわれる。利尻島のアワビはエゾアワビと
呼ばれる種類のものなので大型のアワビは少なく、最大のものでも七穣（個）、八穣ぐらいで一キログラムほどの重量である。

利尻島付近でアワビの漁獲量が少ないのは、流氷がきて、海水の温度が急に低下するとアワビが死んでしまう率
が高いためで、アワビにとっては生息しにくい自然環境にあるためだと言われた。

また、近年ではアワビを活きたまま出荷するので、ウロ（内臓のある厚いフチのある部分）に「アワビカギ」を
かけるとウロに傷ついてアワビが死んでしまうことが多いので、アワビカギをウロにかけるとアワビを採取しや
すいが、キズアワビにならないように注意して採取するようにになったという。

アワビカギは先端の鉄製のカギの部分の長さが十三センチ、カギの曲った部分六・五センチで全体が四角（丸棒
の扁平に削られており、弾力性がある。コクワの木は利尻島に自生していた。棒の長さは水深にあわせて調節する。
写真参照
アワビの生息している自然条件等によって異なる。
アワビはアワビガリ捕獲用の自然条件で、太さ1・5センチの鉄の丸棒を丸めたものに長さ1メートル20センチほどの縄をつけたもの。コンプを採取した時に水中に吊して入れたりする時に使用する。網目は二・五センチ。

ワカメは四月中旬頃から採取がはじまり、五月下旬頃までつづく。六月中旬頃まで続いて採取する年もある。エゾサーペンウニは六月初旬から中旬頃が口明けとなり、八月下旬までが採取期間と定められ、キタマラサキウニの採取は九月一日が口明けで一ヶ月間と決められている。採取時期は異なるが、この二種類のウニは生息している水深も異なる。

一般的にウニの生息場所はエゾサーペンウニよりもキタマラサキウニの方が深い場所にいるので、採取する漁具も異なるものが使われてきた。水深のある場所に生息するキタマラサキウニは潮がかかるか、潮流の影響を漁具にうける割合が大きいので、タモ鳥も大きく重いものを使った。また、タモ鳥（網）では潮流の影響
ハサミは左右から物をはさむようにする一般的な鉄の原理を応用したもので、一方を棒の先に縫いつけ固定し、他方の部分に細繊をつけて、船上からガラスバコで海底を見定め、細繊を引くことでウニを容量に追込む。さみ込むように工夫した漁具である。先端の鉄製の部分は三十五センチほどである。ヤスは二本のものを三角形の三点に位置するようつくりでカエシがない。したがってウニを突くというよりも、はさみ込むように使用される。ハサミは昭和のはじめ頃から使われていたという。

これに対して比較的浅い場所に生息しているエゾバカンウニ（ガンジエ）を採取するには、タモを用いて掬い取るだけであった。エゾバカンウニはスガモと呼ばれる海藻の中にいることが多いので、タモで掬った方が採取しやすいこともある。ただしタモの小さなものは入口の直径十六センチで〇・五センチほどの中の鉛をまるめたもの。竹材の棒（竿）にすげてある根元の部分は途中半分までは針金を二重にして制作されていった。網袋の深さ（丈）は六十センチで網目
千葉経済論叢 第32号

二 六

は一・五センチ。網の材質は綿系。棒の長さ約六メートルで、網を付けた根元の太さは直径約二・五センチ。棒は

他メートル半ごとに継いである。（写真参照）

別の大きなタモを実測すると網の入口の直径約二十一センチ。ステンレス材の針金を使用しているが、ステンレ

ス使用以前には八番線の針金を使用していたという。網袋の深さは直径約十四センチ。網目一・五センチで材質は綿系。竹材

の棒の長さ七・五メートル。網袋を付けてある根元の太さは直径約二・五センチ。竹材の棒の長さ半メートルごと

に継いである。継ぎ目には巻いた鋼材が使用されていた。

ウニをつかむに当たって、イソブネの上で身体を寝せるよう（横になる）にした方が身体はらくだという。

コンブ採取は七月から九月まで。あるいは七月中旬頃から十月までまでの三ヶ月間が漁期であった。

コンブ採集はコンブガマという所がいる。コンブ採取するときは、ネジリシバをできるだけ立てて使用した方が荷こ

たえ（たくさん量をいう）があるという。

ネジリシバはエゾマツまたはヒノキ材で、利尻島内にエゾマツは自生していたがヒノキ材はない。したがっ

て、上述したようにコンブガマと呼ばれる海藻採集用のカマを使って採取することもおこなわれた。その

後、昭和三十五年頃からグリグリと呼ばれ、棒に先端に鉄棒を曲げたネジリ棒状のものを付け、コンブ

採取に使われた。
ねじり取るような道具が使われるようになった。（写真参照）

ネジリバは全長約一メートル半分の長さ、下部の二センチに分かっている部分が一メートルの下半分の形のもの。上部の両手でねじるT字型の部分をホコのツギテと呼ぶ。一般的にネジリバは下部の二センチに分かれたコンブを直接ねじる部分を片方は約三センチほどの長さ。これが短い手で握ってまわすハンドル部の左右の長さは全長四十一センチ。したがって、ネジリバの長さはホコのツギテを測定すると、一メートル七十五センチであった。したがって、下部の二センチに分かれている一メートルの部分に継ぐと全長二メートル二十五センチのネジリバができる。コンブ採取用に用いる自振がマサの大きさを示すと刃の長さは全長三十二センチ、厚みは一・二センチ細い部分にあたる棒（筆）はもとは竹材やヒノキ材を用いていたようだが近年はグラスファイバー材などが用いられるようになった。（写真参照）

また、上述したコンブ採取用の（グリグリ）と呼ばれるコンブ採取用具は、先端の部分がすべて鉄製で、長さ約二十センチの四角い鉄製の柄の先に、太さ一・六センチの鉄棒をハセンの長さに継いで突き出し、同じ太さの鉄棒約四十センチのものを二本、やや螺旋状に曲げ、直径が二十七センチほどになるように溶接したものです。（写真参照）
照。この鉄製部分の先端を棒（竿）につなぐ。全体が軽いことがある場合には、柄（棒・竿）の根元に鉛材を巻きつけて使用することもあったと聞いた。

イソマヨによるテングサ採取はイソブネの船上からガラスパコで海底を観き、『テングサツキ』と呼ばれる柵状の道具を用いて岩礁上で押すようにしてテングサを押す。これにハガネの柵状の道具を付けて、船上より押して柵の部分でテングサを用いて取る。ハガネの長さは水深にあわせるのが五メートルほどの深さが限度。船上から押すので、揺抜き取るには首は曲っていい。

イソマヨでのタコの捕獲はイソブネの船上よりガラスパコで海底を観き、ミズダコがいそうな場所に鉛材の錘の上に数本のカギを針金でついた「シバリ」を用いる漁法で呼ばれる漁具を用いる。シバリは柔軟で、タコの口をもつたにすぽりとつかむもので、タコの口をつかんでかくと魚のような漁具でもタコ漁はおこなわれてきた。タコは夜行性なので、夜が明けると同時に漁に出たほうが漁獲が多いという。早朝五時頃には出漁し、夕方の三時頃までおこなわれている。タコはキャリ巻きを用いてのミズダコ漁は、重量二十五〜三十キロ以上あるミズダコを引上げることもあるので、道カギを使用してのミズダコ漁は、重量二十五〜三十キロ以上あるミズダコを引上げることもあるので、道
具は頑丈につくられている。
普通のタコカギは、カギの部分が二本で先が二叉に分かれているだけだが大型のミズダコを引きあげる場合は四
本のカギが付いたものを用いた。実験のタコカギは八センチほどのが先にツメが七センチ曲げられて
いる。ツメの太さは〇・七センチある。
この鉄製のカギを、柄（梢・竿）の先端に付けて使用するが、柄の長さは水深にあわせて調節する。柄の大きさは
約三・五センチ、長さは五メートルから七メートルほど。材質はジュリ、ラクヨウなど、内地の材を用いた。地元
の利尻で産する樹木では材質が弱くて使えないという。第二次世界大戦が終戦をむかえる以前には樺太（サハリン）
方面からも柄の材料などを入手したことがあったという。
また、竹材の柄（梢・竿）を用いることもあったが、竹材は富山県内の各地から取り寄せたという。
先端のツメが二本に分かれているタコカギも形状などはほとんど変わらないという。鉄製のカギの部分は地元の
鍛冶屋に注文して製作してもらったもので、鷲泊には鍛冶屋が三軒ないし四軒もあった。

イソマツリによる魚突きは、イソツブの上からガラスをで海底・海底を観き、足で車を用いて操作し、三
本ヤセや【四本ヤセ】を用いてアブラコ、カジカ等の礁魚を突く。自家消費用ほど漁獲であった。特に秋に
なるとアブラコなどの産卵のために浅場に入ってくるので突きやすい。アブラコは【飯寿司】という野菜を
加えた寿司にして食べがカジカは皮がかたいので皮をむいて味噌づけにて保存食品とした。

日本漁業伝統の研究 [Ⅸ] 田邊
三本ヤスはカエしのない三角形の各角にヤスの部分が多くなるような形態のものだが、四本ヤスは四角が一直線上に横に並んだ形態のヤスであった。この地ではヤスのカエしの部分を「アゲ」呼ばんでいる。このようにヤスをはじめ、アワビ採取用のアワビカギなど、自分の使用したい、こののみの形態を地元の鎧甲屋に注文して製作してもらい、うことも多かったので形態には個人差があった。

イソマワリをおこなう際、海中・海底を観き見で捕撃対象物を探すために「ガラスパコ」が用いられていた。話者の小竹進氏（昭和八年生）にあれば、話者の家は三代にわたってイソマワリで生計をたててきたのだが、先々代（祖父）の時代からすでにガラスパコを口にくわえてイソマワリをやっていったという。したがって、ガラスパコ使用以前におけるイソマワリの漁法については聞くことはできなかった。

調査当時使用されてだったガラスパコ実測した結果は、大きさは、高さ（深さ）が三十センチ、下部のガラス部の一部が二十五センチの四脚。上部の顔の部分の一辺は十五センチで四角形。その四角のうちの一つの角が切り込まれ、この部分に小さな板が入っている。また、ガラスパコを観た際、太陽光線がガラスパコの中に差し込むと、海中・海底が見えにくいので、顔を付けた隙間から光線が入らないように四角い部分の角に光線よけが二ヶ所付けられている。（写真参照）

ガラスパコの材質はエゾマツか杉材。また、ガラスパコが流れていかないように細紐が付けられており、イソマワリをするときに一方をイソブネに縛つかることができるように工夫している。
以上のようない『イツマワリ』による漁の他にミズダコを専門に捕獲する『イサリ』（イシャリともいう）という漁法がある。イサリは『樽流し』とも呼ばれる漁法で調査当時より三十年ほど以前に道立中央水産試験場（余市町）の技術指導によりはじめられた漁法だと言った。

『イサリ』は、他地域でいう磯漁（見抜き漁をイサリとよぶ地域もある）とはまったく別の漁法で、この地方でミズダコだけを専門に漁獲する漁法のことである。イサリは水深三十メートルから五十メートルの海底にあるミズダコを漁獲するので大型漁船（五トンないし六トン）が使われる。

漁具は醤油樽ほどの大きさの樽の下にイサリと呼ばれるカギ状の道具を紐で吊し、カギの部分でミズダコをかけ取るのだが、カギの部分は鋼線を曲げた約四センチの長さ四本、それにあわせて短かいカギ六本が付けられている。このカギの部分に餌を縛りつける。餌はホッケ・サバ・アブラコの他に雑魚など。樽数二十五個ほど。

『イサリ』と呼ぶのでその名があると聞いた。

『イカ一本釣』は夜間の漁で、毎年九月の一ヶ月間が漁期であった。漁場は現在、夕日ヶ丘展望台から呼ばれている。
ニシン刺網は底刺網で、網を張る水深は浅い場所で五尋から十三尋ほどで、底に掛ける。網の長さはヒトナガシ、フタナガシと数え、ヒトナガシの長さは百五十間だが、この網をつけ、二千間から三千間の長さにする。普通でも中間の三千間ほど。網の丈（深さ）は三尋から四尋。網目は普通は一尋で百目。二寸目から二寸十二分のものを、底刺網なので網には石の鉄を数多く付け、一部は浮篭で網をささえる。

「ホッケ巻網」は網の長さ、百間、網の丈、深さ、十尋から十五尋のものを二艘の漁船が魚群を囲むように曳き、巻きとる漁法で、そのために「二艘曳き」ともいった。一艘の漁船は五人ないし六人が乗り組むので総勢十数人が必要になる。乗組みの者を「若衆」といった。特に年齢制限はないが昭和の初期頃は二十歳を過ぎると漁師をする者はほとんどいなかったという。

網元がいての巻網漁だったのでは、漁期になると船頭が若い衆を函館、青森、南部方面から毎年同じように雇い入れてきた。ニシン漁も同じであった。
イソマツリに使用する小型の木造和船を「イソブネ」とよぶことは前述の通りである。

イソブネの大きさは、シキの長さが十六尺五寸から十七尺、船幅が三尺というのが一般的だが、個人的に船幅三尺二寸ないし、三尺三寸の大きさに注文することもあった。このような場合、船大工に注文する際、ケイガ（一般的に船底）からの方箱があがり、カイグを「オコス」（立てる）とイソブネの船幅はせばまる。

船底（この地方ではムダマと呼ぶ）に付けるカイグを「ネセル」（ねさせる）とイソブネの船幅は広がり、カイグを「オコス」と立てるとイソブネが船幅を広げる。海面までの距離を決めるため、注文に際しては重要な条件となる。

イソブネは進方向より前方からオモテ・ドーナ・トモの三つの部分に分かれている。またイソブネの形態の特色は「ハネカジ」として後に本のターナーにある部分が長く伸びている。またイソブネの胸箱はオモテとドーナの間に取り付けられた「タカマ」と呼ばれる部分にクルガイ（車轂・オー）をさして濁ぐ。
採取したウニを仲間に売った。昭和の頃は「塩ウニ」にして出荷していたが、調査当時は生（なま）のまま中身だけにして出荷していた。

昭和初期頃まではイソマワリでコンブ採取をおこなってもウニの採取はほとんどおこなっていなかった。しかし、その後、ウニの採取をはじめ、調査当時には上述したようにイソマワリをする五十人の組合員の九十九パーセン
トがウニの採取をこなしている。

ウニを採取する組合員の増加とともに、乱獲を防止するため、組合では採取漁具に制限を加えるようになり、エゾアマウニを採取する場合は「タモ」（網）を使って掬うという方法だけが組合員に認められている。しかし、九月一日より一ヶ月間ほど解禁のキタムラサキウニの採取にあたっては「タモ」でも「ハサミ」でも採取
してかまわない。特に使用する漁具に制限はない。

エゾウニは、近場の礁のウニは小さくて中身がつかないが、沖のウニは大きくても中身が入
ていないのだと言っていった。
採取したコンブは個人的に浜に並べて天日乾燥させる。コンブを干すにはクマ笹の葉を下に敷くと風通しが良くなり、乾燥がはやく利点が多い。また、浜の石の上と熱収支が良いので、浜の石の上も乾燥に適しているという。

ニシン刺網漁に関しては上述したことを重複する部分もあるが、別の話者からの聞き取り調査の結果も掲げ、調査地における漁業活動をより詳細にとどめておきたい。

昭和三十年の春頃までニシン刺網漁がさかんであった利尻島（利尻郡利尻富士町篠泊字栄町・旧東利尻町）では、ニシン漬に向使用してきたニシン刺網は網の長さが三千間（約六千メートル）にもおよぶ網であった。刺網の長さが三千間で約五尋。深い場所で十二尋から十三尋。網目は二寸目から二寸三分目で、百目が標準であった。毎年正月を迎えると網漁の準備がはじまった。網の修繕が二月いっぱいまで続いておこなわれ、三月に漁期に向って網をたたずめなど仕事で五月月中旬頃まで仕事をする。ニシン刺網は長さがおよそ四千間あるといつても網全体がつながっているのではなく、上述のようにヒトナガシ
こうした長い網を使用する場合は労働力もさることながら網の保管場所もとより網干場の確保が経営者にとって重要であった。
特に網材が麻や木綿の時代には、漁網を常に天日乾燥しておかないと網が腐ったり、もろくなったりしてしまうため、広い網干場が必要であった。したがって、広々としている北海道で、土地の価格が安いからといって、四千間もの漁網を広げて干す場所を確保するのはかなりの財力が必要であった。
そのため、第二次世界大戦が終わるまでには、網元といってても財力が経営している漁場が多かった。
話者の泉幸雄氏（昭和七年三月十三日生）によると、泉家で現在所有している網干場の所有権を手に入れたのは昭和二十年の財閥解体の時であった。企業（財閥）が解体した時に、当時百万円で波打際の網干場を入手したが、それから十年ほどした昭和三十年の春にはニシンが産卵のために涸渇してこなくなってしまった。
泉家ではニシンの刺網の他にも定置網二統、ホッケ巻網もおこなっていたので、波打際の広い場所は必要であった。上述したように、ホッケ巻網の網の長さは二百間、網の丈（深さ）は十尋から十五尋ほどあるので広い網干場が必要であった。番屋では六十人の「ヤン衆」が働いていたという。
泉家は本調査当時は「ホテル・ニュー利尻」という旅館業をおこなっていたが、本稿執筆時すでに廃業してしまった。
利尻島は干満の差が普通で三十センチから三十五センチほどしかない。したがって波打際まで私有地であるといえども、海岸線まで個人所有なので、全国でもまれにみる国有の海辺地（海浜地）のない地域である。したがっ
この資料調査は著者が平成四年（九九）八月二十六日から二十九日にかけて実施したものである。あわせて同地に在住の小竹進氏（昭和八年十二月一日生）からの聞き取りをまとめて Bamboo のあるものである。

また、本調査における漁具、民具等の実測は、特に表記のないものについては、鶴泊のものはすべて話者の小竹進氏が所有していたものである。

本稿の調査地である利尻島は筆者が「磯漁伝統の研究」をこなすために実施した全国的な調査の中では、系統的な調査として最も北に位置する地域である。

この他にも断片的に、部分的な調査として北海道礼文島の香深がある。筆者が香深や鶴泊の最初の調査をおこなったのは昭和三十七年の八月であったから、今年（平成十七年）から四十三年も前のことになる。
礼文島の香深で使用されていた漁具、漁具は利尻島のものと同じだが、香深にはアワビ採取用の古い「ヤス」と呼ばれる漁具があった。正確には使用地は元地であった。元地ではアワビをイソウネの船上から三本の「ヤス」を使って突き取ってきた。写真参照）香深でアワビカキが使用されるようになったのは、昭和三十六年に二名の漁民が焼尻島で技術を習得して以降だといわれる。以前はアワビを生ききたまま出荷することはほとんどなく、干渉に加工しての出荷であったため、アワビに傷がつくとヤスに変えてヤスでアワビで売ることができた。しかし、昭和になって生貝（活）のアワビを出荷するようになった。こうした香深の元地の事例をみると、利尻島においてもアワビカキが普及していた。使用する漁具が変わったのである。

なお、香深の元地で実測したアワビ採取用のヤスは、鉄製で先端が三本に分かれている。アワビカキの長さは三センチ、横幅は最も太い部分の差し渡し十二センチであった。写真参照）鉄製の部分は一本ずつ分かれており、それを三本あわせて棒（竿）の先に締めつけるようにしてある。棒（竿）から出ている鉄棒の大きさが使われるようになったことなどがわかる。コンブ採取用の「グリグリ」などは昭和三十五年以後に使用されはじめたもので、その典型ともいえる漁具の一つである。
今後は、このように一地域における産業にかかる漁具等の変容する部分についても、伝統とあわせてみていくことが重要であるといえよう。なお、未筆ながら話者・氏の皆様をはじめ、アワビ漁業についてのご指示をいただき、北海道開拓記念館の山田健夫学芸員に謝意を表する次第である。参考文献及び引用文献

注

(1) 瀬戸清子 海女二七頁 古今書院 一九五五年
(2) 西谷栄治 利尻島の海女雑考 八六年
(3) 前揭書 三三頁

注(1)(2)と同じ

（たなべ さとる 本学教授）
明治三十二年の「北海道水産予察調査報告」に「増毛地方ニ於テ鮎カギト称スルノヲヲ用フレドモ広ク行ハレズ」とみえる。
（北海道開拓記念館・山田 健氏教示）
引きあげられたミズダコ
重さ10キロで小物（朝日新聞）
アワビカギについては、さらに、明治二十二年の『北海道漁業志稿』にも「鈎は苦前郡就中焼尻・天売二島・増毛郡等に多く行はる」とみえる。
日本雑漁伝統の研究

イソブネのトモ
「ハネカジ」の部分

コンブとり
「タカマ」にクルマガイ
（車操）をさす

コンブとり
（操船・移動中）
アイヌ風俗絵巻（コンプとり）明治初期写（木村巴江画）

昭和38年頃のコンプとり（礼文島の絵ハガキより）

調査当時のコンプとり